

新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器

春日真実

はじめに

大洞原C遺跡は新潟県妙高山村大字坂口新田字山谷地に所在する（第1・2図）。遺跡は妙高山東麓の緩斜面上に位置し標高は440～450mを測る。1976年に新潟県教育委員会により実施された埋蔵文化財の分布調査により遺跡が発見され、その後上信越自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団により、1995年4月から8月にかけて、11,580m²の発掘調査が行われた。また、1997年には『上信越自動車道発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』（以下では単に「報告書」とする）が刊行されている〔三ッ井ほか1997〕。調査の結果、遺構は検出されなかったが、縄文時代後期の土器・石器が20点、弥生時代末から古墳時代前期の土器が平箱約20箱、奈良・平安時代の須恵器・土師器が平箱1箱出土している。

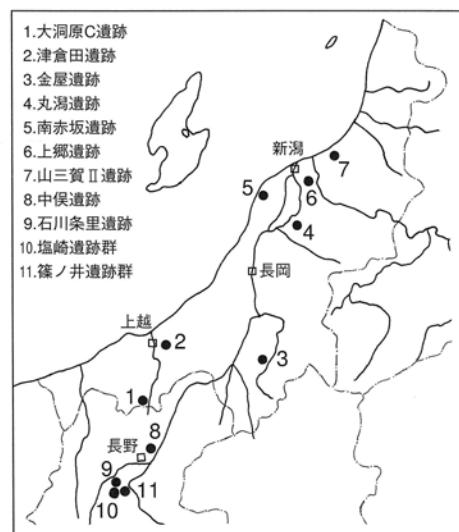
出土土器の編年的位置 大洞原遺跡出土の弥生時代末から古墳時代前期の土器については、報告書の中で三ッ井朋子が編年的位置について検討を行っている〔三ッ井1997〕。また、筆者もかつて、簡単に触れたことがある〔春日1998〕。

三ッ井は、弥生時代末から古墳時代前期の土器を在地系・北陸系・東海系・中部高地系・近畿系・近江系などに大別し、系列ごとに、既存の編年案との対比を行っている。そして、在地系の土器については10・11を除き坂井・川村編年〔坂井・川村1993〕のII1・II2期（新潟シンポ編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会1993〕の5・6期）、北陸系については漆町編年〔田嶋1986〕の5・6群土器、東海系については廻間編年〔赤塚1990〕のII期、中部高地系については七瀬遺跡の段階区分による3段階、畿内系については庄内2式期〔寺沢1986〕に位置づけ、これらの所属時期の平行関係は矛盾しないとした。

一方筆者は新潟県の古墳時代前期の土器について概要を述べたことがあるが、その際に大洞原C遺跡出



第1図 大洞原C遺跡の位置
(国土地理院発行「妙高山」1:50,000原図 平成5年発行)



第2図 主な遺跡の位置

土の一部が、新潟シンポ編年の9期ころに下るとした。以後、大洞原遺跡出土の弥生時代末から古墳時代前期の土器について検討を行った論考はない。

小稿の目的 大洞原C遺跡出土土器の一部が新潟シンポ編年の9期頃まで下るという筆者の認識は、現在でも基本的には変わっていない。ただし、前稿〔春日1998〕（以下、前稿とある場合は、特にことわらない限り、これをさす）では時間的な制約もあり、大洞原遺跡出土土器の一部が新潟シンポ編年の9期まで下る根拠について、詳しく述べることはできなかった。また、土器群の抽出が極めて恣意的なもととなつておらず、誤りも多い。そこで小稿では、出土状況の検討などから、新潟シンポ編年9期を中心とする時期まで下る土器群を抽出し、誤りについては訂正したい。そして、抽出した土器群を基に、他遺跡から出土した当期の土器群も考慮に入れつつ、土器様相からみた当時の頸城地域と北信（主に善光寺平周辺）の交流のあり方も検討していきたい。

1. 出土土器の概要

報告書では弥生時代末から古墳時代前期の土器が64点図示されている。内容は釜（註1）1が55点、壺2点、小型壺・鉢4点、高杯1点、器台1点、鍋1点である（第3図）。以下、器種ごとに概要を述べる。なお、以下に示す大洞原C遺跡出土土器の番号は報告書の報告番号と一致する。

釜（10～55）：報告書の中で三ッ井が分類を行っており、ここではこの分類を参考にA～Gの7種に大別した。A類の大半およびB類は越後・佐渡も含めた北陸地方に広く確認できるものである。これに対しC～G類は、それ以外の地域の影響を受けた土器である。

A類（10～20・29～31・49・50）としたものは、口縁部が「く」字もしくは「コ」字に屈曲するものである。口縁端部などの形態により、口縁端部をつまみ出すA1類（10・11・13・14・16）、口縁端部に面を持つA2類（12・15・17～19）、口縁部が外反ぎみにのび、口縁端部が丸いA3類（20～23・25・26）、口縁部が長く直線的にのび端部が丸くなるA4類（27・28）、頸部の屈曲が緩いA5類（30・31）、口縁部が短く頸部が鋭く「く」字に屈曲するA6類（50）の5種に細別する。

B類（32～40）は有段口縁を持つものである。頸部から口縁部にかけての屈曲が明瞭で口縁部外面に擬凹線を施すB1類（32～34）、頸部から口縁部にかけての屈曲が明瞭で口縁部外面に擬凹線を施さずヨコナデのみのB2類（35～39）、口縁部下端を肥厚させることにより有段口縁状とし、口縁部外面に擬凹線を施さないB3類（40）の3種に細別する。

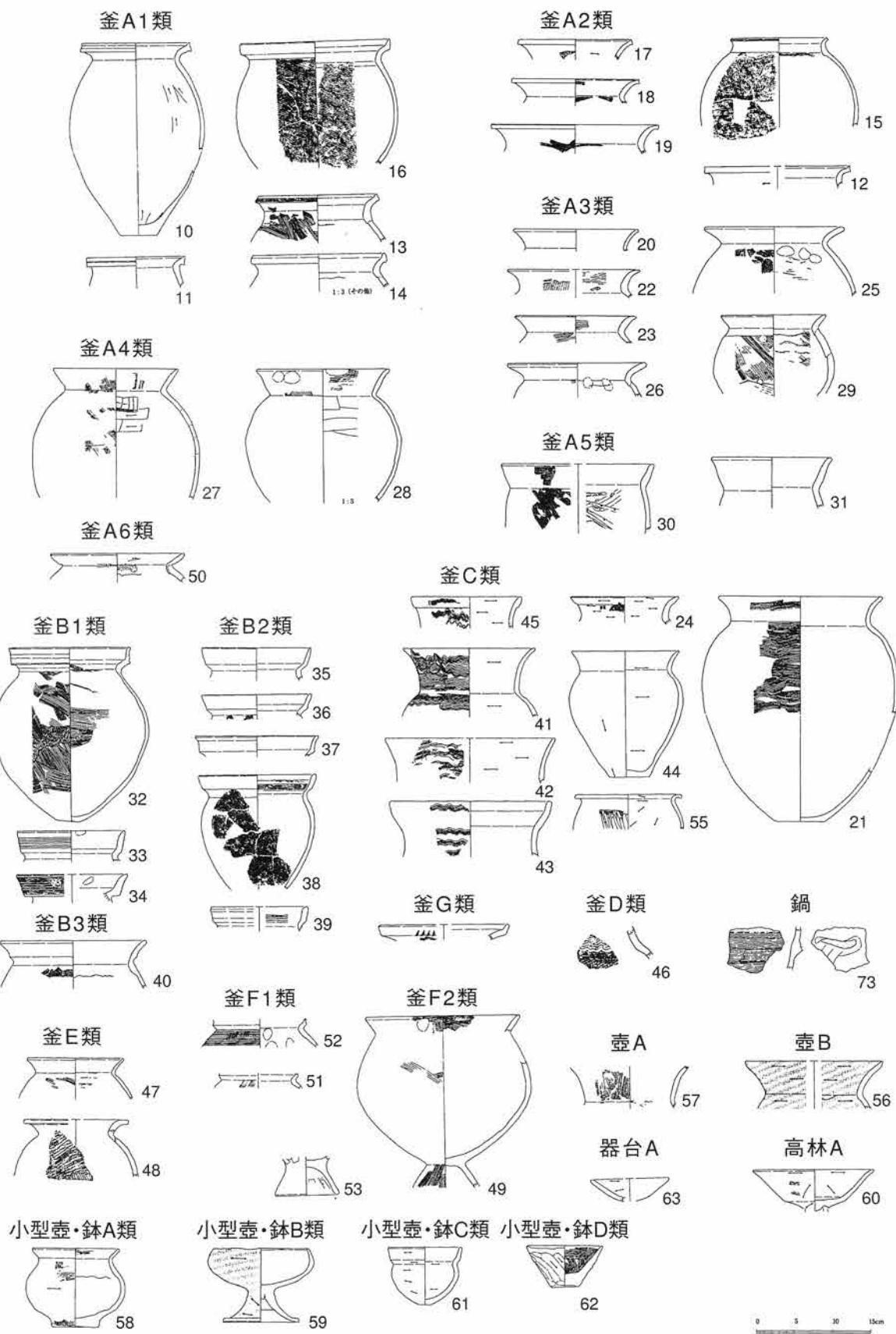
C類（21・24・41～45・55）は箱清水式土器の系譜を引くと思われるものを一括した。胴部から首部にかけて櫛描波状文がめぐるものが多い。

D類（46）は樽式土器の系譜を引くと思われるもの、**E類（47・48）**は体部にタタキ痕があり、「く」字口縁となるもので、近畿地方の影響を受けたと思われるものである。**F類（51～53）**は東海地方の影響を受けたもの。いわゆる「S」字状口縁台付甕（釜）をF1類、その他の台付釜をF2類とする。**G類（54）**には受口状口縁を持つ近江系の釜をあてた。

これらの釜のうち、主体を占めるのはA・B類である。また、C類も一定量確認できる。これに対してD～G類は客体的な存在である。

壺（56・57）：外反する比較的長い口縁部を持つもの（A類：57）と、箱清水式土器の系譜を引くと思われるもの（B類：56）の2種が確認できる。

小型壺・鉢（58・59・61・62）：4個体図示されているが、それぞれ形態が異なる。安定した平底を持ち、



第3図 大洞原C遺跡出土の弥生時代末から古墳時代前期の土器

口縁は「く」字状となるもの（A類：58）、無頸壺に低い脚がついたもの（B類：59）、有段口縁を持つもの（C類：61）、体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの（D類：62）がある。

高杯（60）：杯部が1点図示されている。便宜上A類とする。畿内系の屈折脚の高杯になるものと思われる。内外面とも横方向を基調としたヘラミガキを行なう。

器台（63）：報告書では蓋としたが、口径が小さく、外面よりも内面の調整が丁寧なことから器台の受部と考えた。内湾ぎみにのび、口縁端部は丸い。高杯と同様に便宜上A類とする。

鍋（73）：報告では平安時代のものとしたが、弥生時代末から古墳時代前期までさかのぼる可能性が高い。類例は、新潟県内では裏山遺跡にある。

以上、大洞原C遺跡から出土した土器について分類を行った。釜B・C類が定量確認でき、このうち釜C類のほとんどに胴部から口縁部にかけて櫛描波状文が確認できる点、「く」字口縁で体部にタタキ痕を持つ釜が存在する点、赤塚次郎の分類による「S」字状口縁台付甕（釜）のB類とされるものが存在する点、小型壺・鉢B・C類が存在する点などから、新潟シンポ編年5・6期とした三ッ井の編年的位置づけは妥当であるように考えられる。ただし、畿内系の屈折脚の高杯が存在し、釜A2・A3・A4類が定量存在する点は、土器群の年代を考える際に留意しなければならないであろう。

2. 土器の出土状況

大洞原C遺跡からは、遺構は検出されなかったが、まとまって土器が出土している地点が数箇所存在する。集中地点毎に土器の時期差が認識できる可能性があろう。ここではそれぞれの集中地点からどのような土器群が出土しているかみていく（第4図）。

集中地点1 4F・Gおよびその周辺にある略円形の遺物集中地点である。24・33～37・43が出土している。釜B類（有段口縁）が5点、釜C類（箱清水式土器の系譜を引くもの）が2点確認できる。

集中地点2 6Eおよびその周辺にある「L」字型の遺物集中地点である。12・13・16・17・19・28・41・42・44・45・58・60が出土している。釜はA1（「く」字口縁、端部摘み上げ）・A2類（「く」字口縁、端部面取り）が各2点、A4類（直線的で長い「く」字口縁、端部丸）が1点、C類が5点、このほか小型壺・鉢A類、高杯A類が1点確認できる（註2）。ここでは、釜A2類（12・19）・釜A4類（28）・高杯A類（60）および釜C類のなかでは特異な形態の55が、6E-18・19・25、7F-1といった集中地点2の南側から出土している点に留意したい。以下では6E-18・19・25、7F-1といった南側を集中地点2a、それ以外を集中地点2bとする。

集中地点3 6F・Gおよびその周辺に存在する帶状の遺物集中地点。10・11・15・21・38・40・49・50・53・57・59・61が出土している。釜A1類2点、釜A2類1点、釜B類2点、釜C類1点、釜F類1点、壺A類1点、小型壺・鉢B・C類が1点確認できる。

集中地点4 18B～Dにある帶状の遺物集中地点。18・22・23が出土している。釜A2類が1点、釜A3類が2点確認できる。

集中地点5 17・18F・Gにある帶状の遺物集中地点。14・25～27・29・62が出土している。釜A1類が1点、釜A3類が3点、釜A4類が1点、小型壺・鉢D類が1点確認できる。

以上、各集中地点ごとに出土土器を見てきたが、各集中地点ごとに釜の組成が異なる点が注目される。集中地点1ではB類とC類により構成されるのに対し、集中地点2aではA2類、集中地点2bはA1類とC類が主体を占める。また、集中地点3ではA1・2類、B類、C類、F類がほぼ同量確認でき、集中地点4・

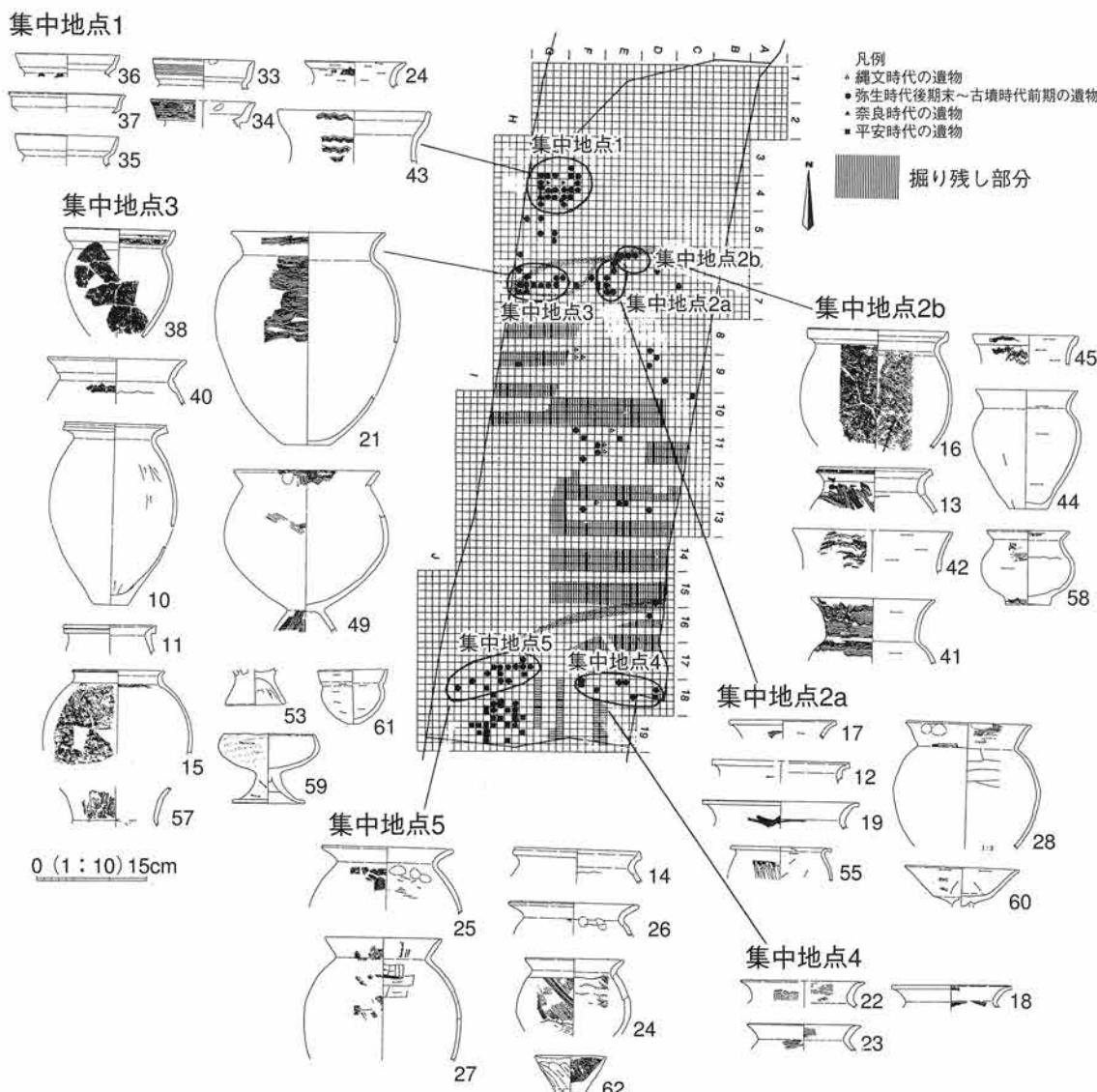
5ではA3類が主体を占める。

新潟シンポ編年5～10期にかけての釜の変化として、B類（有段口縁）が減少し、A類（「く」字口縁）が増加することが明らかになっている。また、A類は時期が下るにつれ、A1・2類（口縁端部を摘み上げるもの・口縁端部に面を持つもの）が減少しA3類（口縁端部が丸いもの）が増加する傾向が指摘できる〔坂井・川村1993、春日1998aなど〕。このような既存の研究成果を参考とした場合、土器集中地点1～5にみられた釜の組成の差は、時期差に起因すると考えるのが最も妥当な解釈と考える。

3. 土器群の編年的位置

このように考えるならば、大洞原遺跡出土の弥生時代末から古墳時代前期の土器について以下のような変遷案(註3)が提示できるものと考える(第4図)。

1期：集中地点1出土の土器をあてる。釜はB1・2類・C類により構成される。他の器種は共伴しておらず、その様相は不明である。



第4図 大洞原C遺跡の土器の出土状況

	釜B1	釜B2・B3	釜A1	釜A2	釜C(小型)	釜C(大型)	その他の器種
1 期	33 34	36 37 35	24 43				
2 期	金E	15 16 17 18 19 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62	21	42 43	金A4	27 28	0 1:8 15cm
3 期	金A3	40 38 39 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62	17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62	金A4	27 28	0 1:8 15cm	
4 期							

第5図 大洞原C遺跡における土器の変遷

2期：集中地点2b・3出土土器をあてる。釜はB1・2類が確認できなくなり、B3類が出現する。A1・2類が増加し、C類は引き続き確認でき、F2類も当期には確認できる。41は首部の屈曲が鋭くこれは箱清水系土器の中でも比較的新しい特徴であろう。釜以外の器種では小型壺・鉢B（有段口縁の小型鉢）・C（台付の無頸壺）、壺Aが確認できる。

3・4期：3期には集中地点2bをあてる。集中地点4・5はやや後続するものと考え4期とする。集中地点2bでは釜A2・4類、釜Cに高杯A類（60：畿内系の屈折脚の高杯）が加わる。55は頸部の屈曲が明確でないことと、内面にヘラミガキを行なうことからC類に含めたが、特異な形態のものである。当期には典型的なC類（41～43）は確認できない。また、釜A1・Bも確認できない。

集中地点4・5からは、釜A1・A2・A4類が各1点出土しているほかは、釜はいずれもA3類である。A1類に分類される14は混入か例外的な存在であろう。釜以外の器種では小型壺・鉢D類（62：体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの）が確認できる。

4. 既存の編年案との平行関係

近年、川村浩司氏は上越市における古墳時代の土器編年を示すとともに、既存の編年（案）との対応関係についても述べた〔川村2000〕。この川村氏の編年（以下、川村編年とする）の是非について網羅的に論じる力量は筆者には無いが、川村氏が「相対的に安定した編年案を提示できる」とする1段階から5段階については賛同する。ここでは、地理的に近接した地域の編年である川村編年と、在地系（あるいは北陸系）土器の対比を行うことにより、他の既存の編年案との対応関係も明らかにしていきたい。川村編年との対応関係については、以下のように考える（第1表）。

大洞原1期は、釜B類（有段口縁）が相当量存在する。川村編年の基準資料で、釜B類が定量存在するものとしては、2段階とした前田遺跡S X 121があげられる。ただし、大洞原1期に見られる釜B類の方が、前田遺跡S X 121から出土したものより、口縁部の屈曲が明瞭で古い様相を持つ。また、やや地域が離れるが川村が1段階と同時期とした緒立B遺跡3号住居跡出土の土器群〔北村ほか1983〕には釜B類が定量存在し、大洞原1期の35・36に類似したものも確認できる。大洞原1期については川村編年の1段階とおおむね同じ時期と考える。

大洞原2期は、釜A1類（「く」字口縁、端部摘み上げ）が定量存在する。また釜B2類（有段口縁無文）・

第1表 編年対応表

新潟シンポ編年 日本考古学協会 [1993]	漆町編年 田嶋[1986]	坂井・川村 [1993]	春日 [1997]	上越編年 [川村2000]	七瀬編年 赤塙[1994]	青木 [1998]	廻間編年 赤塙[1990]	本稿
2期					1段階			
3期	3群				2段階	3期	I式	
4期	4群	I期（最新）						
5期	5群	II-1期		1段階	3段階	4期	II式	1期
6期	6群	II-2期		2段階				2期
7期	7群	II-3期	1期	3段階		5期	III式	
8期	8群	III期	2期	4段階				
9期	9群	IV期	3期	5段階		6期		3期
10期	10群		4・5期	6段階			松河戸式	4期
	11群			7段階		6期以降		
	12群		6期	8段階				

B 3 類（口縁下端を肥厚させることにより有段口縁としたもの）が確認できる。また 14 は川村が 1 段階とした前田遺跡 P 71 出土の小型壺・鉢 C（有段口縁）に比べ小型で口縁部の屈曲も緩く新しい特徴を持つ。これらのことから大洞原 2 期は川村編年の 2 段階と平行する時期と考える。甕 F 2 類（49・53）・小型壺・鉢 B 類（59：台付き無頸壺）の存在もこれに矛盾しない。

大洞原 3 期は、甕 A 2 類が定量存在し、高杯 A 類（60）が確認できることから川村編年の 5 段階を中心とする時期であろう。大洞原 4 期は釜 A 3 類が主体を占めることから 6 段階に平行する可能性が高い。以上のように、大洞原 C 遺跡出土の土器は川村編年の 1・2 段階および 5・6 段階、新潟シンポ編年では 5・6 期および 9・10 期に対応する時期のものと考えられる（第 1 表）。前稿で新潟シンポ編年の中期頃とした資料のうち 49・57・58 については川村編年の 2 段階・新潟シンポ編年の中期のものと考えられ、22・23・25～27・29・62 は川村編年の 6 段階・新潟シンポ編年の中期に下る可能性が高い。また、30 については新潟シンポ編年の中期頃という明確な根拠を示せない。現状では細かな時期は不明とするのが適当と考える。ここで訂正しておきたい。

5. 北信地域との関連

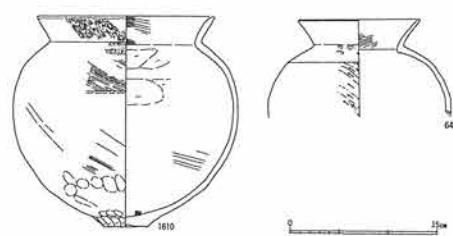
これらの土器群の評価については、様々な視点が存在するものと思われるが、ここでは、北信地域との関連という視点から、以下の 2 つに注目したい。1 点目は集中地点 2 a および 5 出土の土器群は、釜 A 2・3 類に伴って釜 A 4 類（27・28）が存在すること、2 点目は集中地点 2 a には畿内系の屈折脚の高杯（60）が伴っている点である。

釜 A 4 類の系譜：釜 A 4 類は、越後にみられる在地系の「く」字口縁甕と類似するが、越後の「く」字口縁甕の多くが、口縁部が外反し、体部は倒卵型で底径が小さいものが多いのに対し（第 7 図 4・22・33・39・46）、釜 A 4 類は、口縁部が直線的になり、体部は球形に近く、底部は大型になるものと思われる。越後ではあまり出土例が無く、管見では中郷村横引遺跡〔土橋 1997〕・上越市一之口遺跡〔鈴木ほか 1994〕で各 1 点確認でき（第 7 図）、頸城地方に散見できるが、越後の他地域では出土例を確認できない（註 5）。一方、長野市篠ノ井遺跡群や更埴市石川条里遺跡など善光寺平に所在するいくつかの遺跡では、一定量存在するものである（第 8 図 3・6・26・36、第 9 図 3・4）。

また、釜 A 4 類の胎土は、大洞原 C 遺跡出土の 2 点に横引遺跡・一之口遺跡の各 1 を加えた 4 点とも橙色～褐色を呈し砂粒を多く含む。また焼成も堅緻である。こうした胎土・焼成の状況は、C 類とした箱清水式土器の系譜を引く一群の主体的な胎土と共に通する。そして白色から黄褐色を呈し、やや軟質の焼き上がりとなる在地系（ないしは北陸系）と考えられる A 1～3 群や B 群の主体的な胎土・焼成とは異なる。これらのことから、釜 A 4 類は善光寺平など北信地方の影響を受けたものと考えてよいだろう。

高杯 A について：60 は杯部のヘラミガキの方向が横方向を基調とする点に留意したい。高杯 A は新潟シンポ編年の中期頃には、東北地方北部以北を除く東日本一円に定着するが、これは、脚部が長く杯部に縦方向のヘラミガキを行うものと、脚部が短く横方向のヘラミガキを行う大別 2 種が存在する。前者は東海地方や関東地方・東北地方南部で多く確認でき、後者は北陸地方（南西部）に多い。

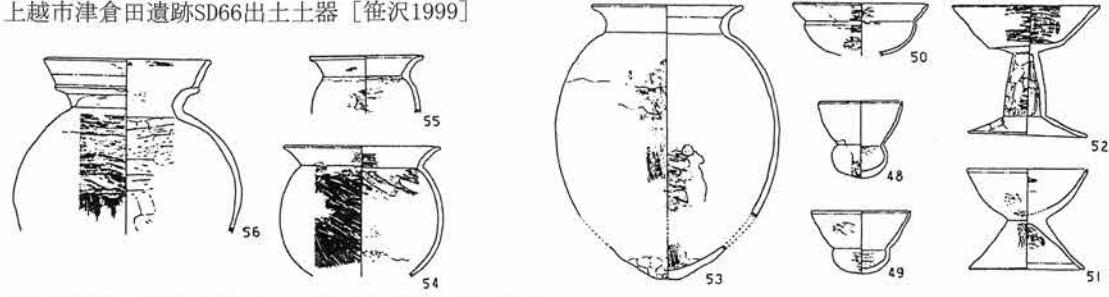
新潟県内で出土した高杯 A には長脚のもの（第 7 図 32・55）と短脚のもの（第 7 図 8・30）の両者が確認できる（第 7 図 8・



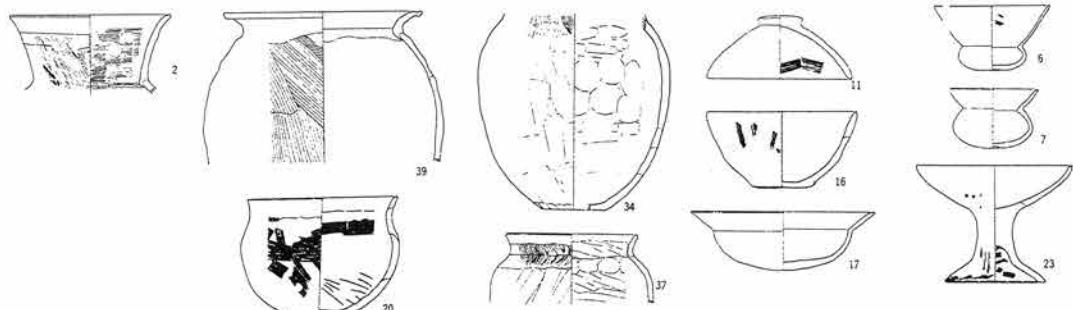
第 6 図 新潟県内出土の釜 A 4 類

左：一之口遺跡（東地区） 右：横引遺跡

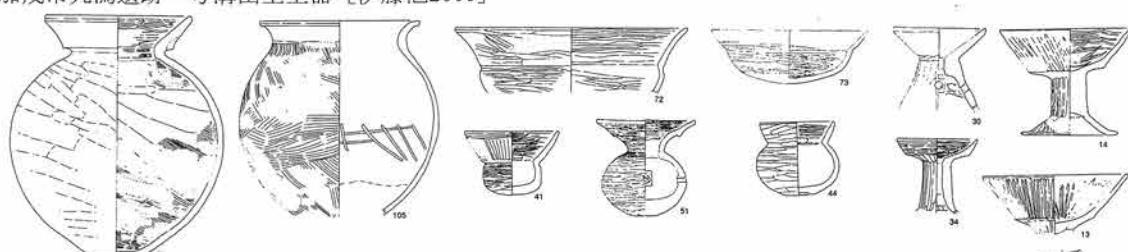
上越市津倉田遺跡SD66出土土器 [笛沢1999]



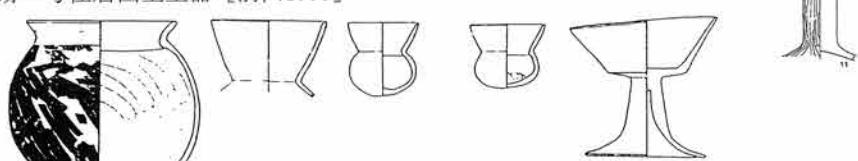
南魚沼郡六日町金屋遺跡SI12出土土器 [山本1985]



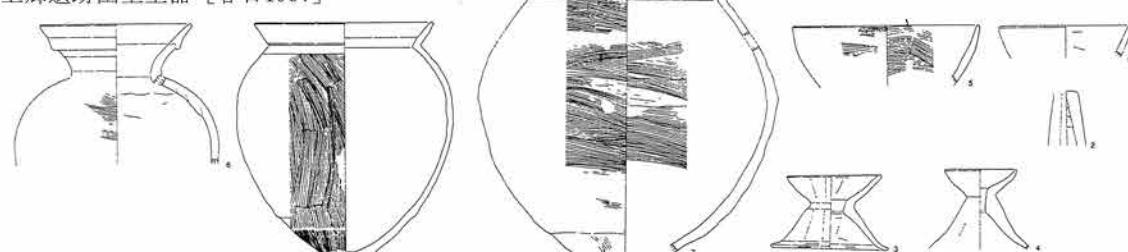
加茂市丸潟遺跡一号溝出土土器 [伊藤他2000]



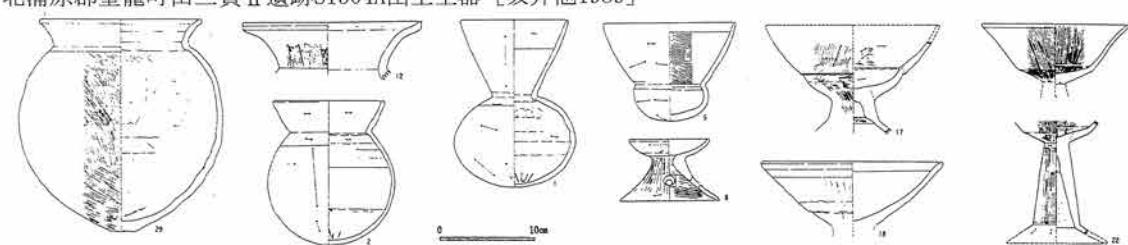
西蒲原郡巻町南赤坂遺跡一号住居出土土器 [前山1999]



中蒲原郡横越町
上郷遺跡出土土器 [春日1997]

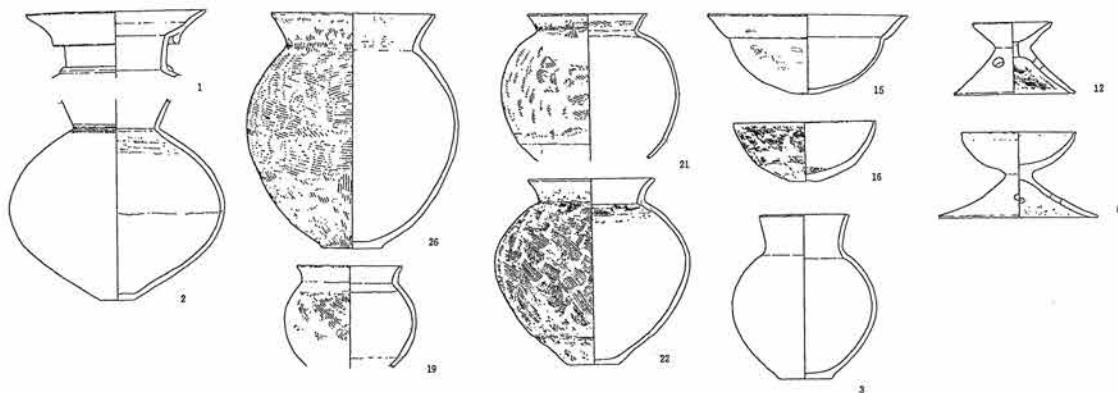


北蒲原郡聖籠町山三賀Ⅱ遺跡SI504A出土土器 [坂井他1989]

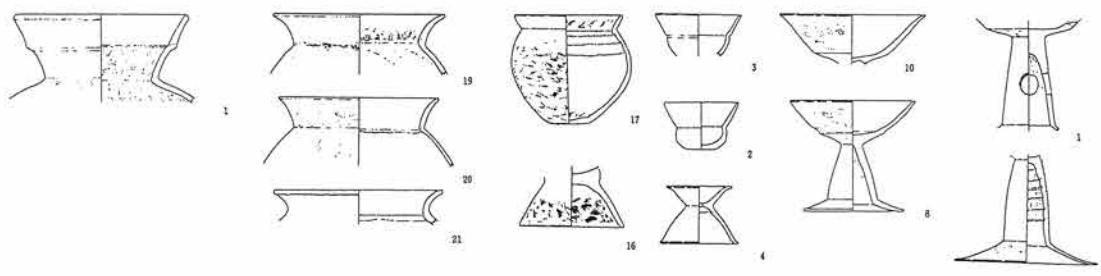


第7図 新潟県の関連土器

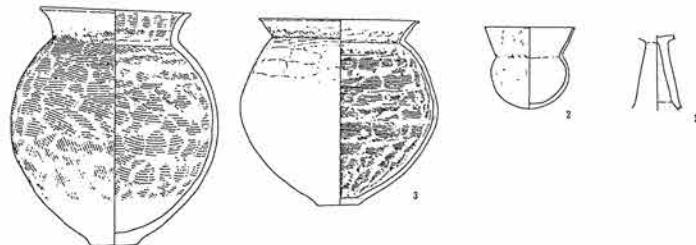
長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点SB70出土土器〔青木他1992〕



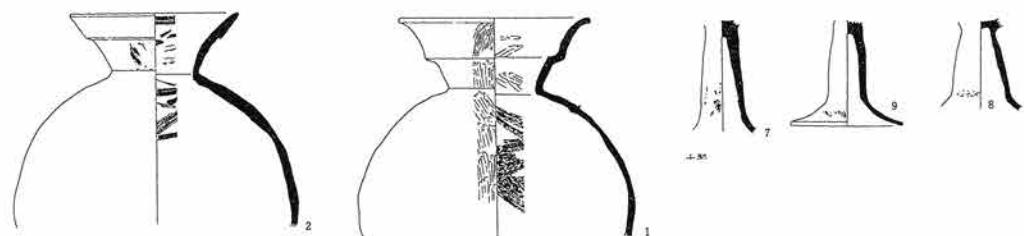
長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点SB118出土土器〔青木他1992〕



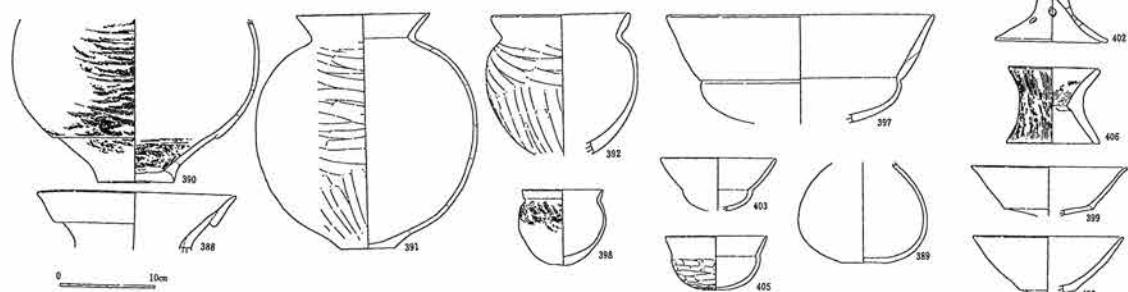
長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点SDZ10出土土器〔青木他1992〕



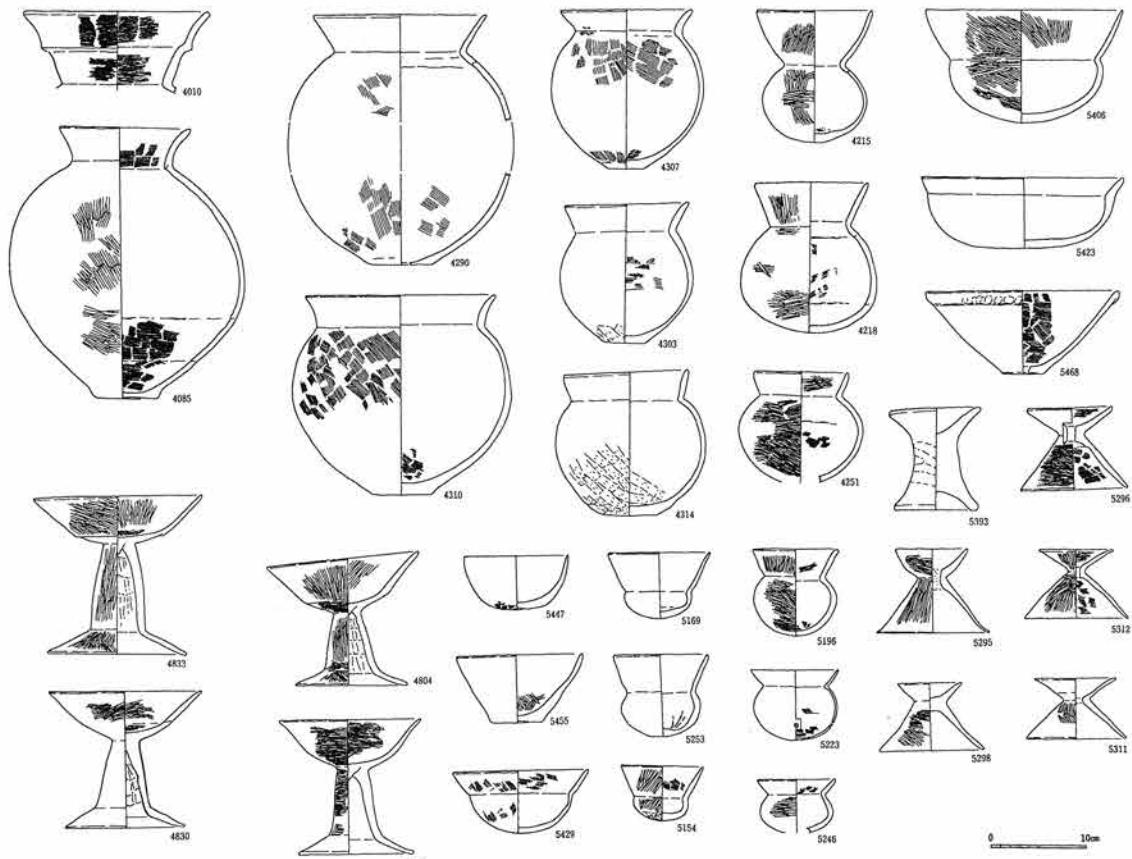
長野市塩崎遺跡群小田井神社地点9号住居出土土器〔矢口他1986〕



長野市中俣遺跡15号溝址出土土器〔千野1991〕



第8図 長野県長野市の関連土器



第9図 長野県更埴市の関連土器群（石川条里 S Q2016 [臼井・市川1997]）

30）。長野県の善光寺平でも、長野市篠ノ井遺跡群や更埴市石川条里遺跡などにみると、杯部のヘラミガキの方向が横方向で短脚のもの（第8図22・32・33、第9図15～17）と縦方向で長脚のもの（第8図23・24・31、第9図14）が混在する。長野県南部では、長脚で縦方向のヘラミガキを行うものが定量あり、善光寺平で出土するこのタイプのものは、長野県南部の影響下に成立した可能性があるが、脚が短く、横方向のヘラミガキを行う。高杯Aは、北陸南西部から越後を介し善光寺平に及んだ可能性が高い。具体的なルートとしては、蒲原平野から信濃川を遡上するルートと、頸城平野から頸南地域を介するルートが考えられるが、釜A4類の分布や大洞原遺跡での高杯Aの出土などから考え、現状では、後者のルートがより可能性が高いものと考える。

結び

小稿により明らかになったことは、多くないが、それらをまとめ結びとする。大洞原C遺跡出土の土器は出土地点ごとに時期差があり、小稿で集中地点1とした地点から出土した土器群は新潟シンポ編年5期（川村編年1段階）、集中地点2b・3から出土した土器群は、新潟シンポ編年6期（川村編年2段階）に比定できる。これらの土器群は、遺跡から出土した土器の大半を占め、報告書で三ッ井が示した、新潟シンポ編年の5・6期を中心とする時期、という出土土器の編年的位置づけはおおむね妥当なものと考えられる。ただし、集中地点2a・4・5から出土した土器群はこれより新しく、新潟シンポ編年9・10期（川村編年5・6段階）の土器群と考えられ、これについては前稿を大筋で追認できた。これらの土器群の量は必ずしも多くないが、頸南地域の新潟シンポ編年9・10期の土器様相を知る上で貴重な資料となる。

頸南地域の土器様相をより整理して提示できた。また、これらの土器群の検討から古墳時代前期後半に

おける頸城地域と北信（主に善光寺平）地域との交流の一端も明らかにできた。

小稿を作成するにあたっては三ッ井朋子氏・笹沢正史氏・菅沼亘氏からご教示・ご配慮を頂いた。文末ながら記して感謝いたします。

註

1) 従来は「甕」と呼称されていたもの。宇野隆夫は「同じ煮炊具を縄文時代に深鉢、弥生時代にか甕（甕形土器）と呼び、後には貯蔵具を甕とするのは他分野の研究者には理解しづらいであろう。また、コンピュータが集計を誤るもととなる。ここでは深い煮炊具を釜、浅い煮炊き具を鍋と呼び変えたい。」と述べている[宇野 1992]。本稿では宇野の指摘に従う。

2) 単に「6E」とだけ記されたものも集中地点2に含めた。

3) 本来ならば、定量出土したC類（箱清水式土器の系譜を引くもの）の変遷についても長野県下の研究成果をもとに検討を行わなければならないが、筆者の力量不足から成し得なかった。

4) 脱校後、十日町市柳木田遺跡から釜A4類が出土していることを知った(十日町市役所[1996]写真456-3)。

引用・参考文献

- 青木和明ほか 1990 『篠ノ井遺跡群III 中電北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点』 長野市教育委員会
青木和明・寺島孝典ほか 1993 『篠ノ井遺跡群（4）聖川堤防地点』 長野市教育委員会
青木一男 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』 長野県考古学会
青木一男 1996 第2編 第2章「まとめ」『大星山古墳群・北平1号墳』（財）長野県埋蔵文化財センターほか
青木一男 1997 「古墳時代前期の土器の分類と様相」『篠ノ井遺跡群 遺物編』（財）長野県埋蔵文化財センターほか
青木一男 1998 『松原遺跡 弥生・総論6・弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センターほか
赤塙 仁 1994 「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『栗林遺跡 七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センターほか
赤塙次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
伊藤秀和・平岡和夫ほか 2000 『丸潟遺跡・新通遺跡』 新潟県加茂市教育委員会・山武考古学研究所
臼井直之・市川隆之ほか 1997 『石川条里遺跡 第2分冊』 長野県埋蔵文化財センターほか
宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
宇賀神誠司 1988a 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
春日真実 1994b 「山三賀II遺跡出土の古墳時代前期土師器について」『新潟考古学談話会会報』第14号 新潟考古学談話会
春日真実 1998 「北陸北東部の土器様相」『前期古墳から中期古墳へ』 東北・関東前方後円墳検討会
春日真実ほか 1998 『上郷遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
川村浩司 1996 「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護』 甘粕 健先生退官記念論集刊行会
川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心にして」『上越市史研究』 上越市
北村 亮ほか 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』 黒崎町教育委員会
坂井秀弥ほか 1989 『山三賀II遺跡』 新潟県教育委員会ほか
坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』 研究者グループ（研究代表者甘粕 健）
鈴木俊成 ほか 1994 『一之口遺跡（東地区）』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
田嶋明人 1986 「土師器より見た古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター
千野 浩ほか 1991 『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡 浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・壇田遺跡』 長野市教育委員会
千野 浩ほか 1992 『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡群 本堀遺跡・柳田遺跡・稻添遺跡』 長野市教育委員会
十日町市役所 1996 『十日町市史』資料編2 考古
土橋由理子 1996 「横引遺跡」『横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群IV』
広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』
前山精明 1999 「続縄文」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
三ッ井朋子 1997 「まとめ」『大洞原C遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
三ッ井朋子ほか 1997 『大洞原C遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
山本 肇ほか 1985 『金屋遺跡』 新潟県教育委員会
吉井雅勇 1994 『古谷地B遺跡・寺田遺跡・赤井遺跡』 新潟県荒川町教育委員会